慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	エーレンフリート・ フォン・ ヒューネフェルト : 未来派を具現する貴族的飛行冒険家
Sub Title	Ehrenfried Günther Freiherr von Hünefeld : Aristokrat, Fliegerheld, futuristischer Draufgänger
Author	Knaup, Hans- Joachim
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2016
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・ 文学 (Hiyoshi-Studien zur Germanistik). No.53 (2016.) ,p.43- 64
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	中山純教授 石光輝子教授退職記念号
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20160331-0043

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

エーレンフリート・フォン・ヒューネフェルト
――未来派を具現する貴族的飛行冒険家――

クナウプ　ハンス・ヨアヒム

1. はじめに

「飛行機」（Flugzeug）及び「パイロット」（Pilot）という言葉は今日では一般的であるが，20 世紀の初めにおいては，時代のパラダイムの転換を表す象徴的な概念の一つであった。19 世紀には，「飛行船」（Luftschiff）あるいは「飛行船船長」（Luftschiffkapitän）という言葉が一般に流布していた。「飛行機」という言葉がドイツ語圏で初めて登場するのは，1893 年の雑誌『プロメートイス』の紙上であり[1)]，「パイロット」あるいは「飛行士」（Flieger），「飛行操縦士」（Flugzeugführer）という言葉は 1907 年頃に広く使われだしたようである。いずれにしても，このような新しい言葉の出現は，空を飛ぶというテーマについて 20 世紀初頭に大きな転換があったことを物語っている。

空を飛ぶテーマは様々な領域に深く関わるものである。まず当然のことであるが，空を飛ぶことに関する自然科学上の認識の深まり，それを実現するための工学技術の急速な発展がなければ，このような言葉の変化は生まれないであろう。しかも飛行の可能性の追求は経済の飛躍的発展に寄与することが期待され，ドイツでは例えばユンカース社などの巨大な会社が

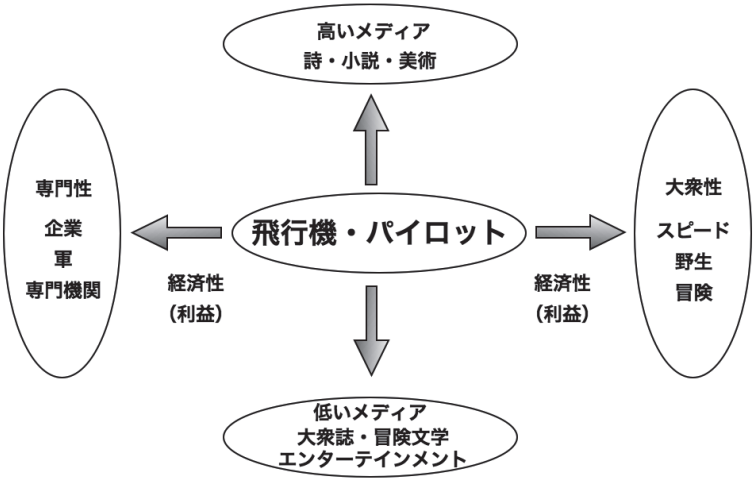
1）Wolfgang Behringer. Constance Ott-Koptschaljaski: Der Traum vom Fliegen. Zwischen Mythos und Technik. S.Fischer 1991, S. 410.

飛行機の開発に取り組み始め，多くの優れた技術者を近代的な飛行機の製造に投入することになる。さらに，戦争の時代である 20 世紀（その前哨戦は 19 世紀後半に始まっているが）においては，武器としての飛行機の可能性も盛んに議論され，それはまた飛行機製造の経済的利益を考える上で重要な要素になっていくのである。航空工学などの専門誌も刊行され，情報の量と質の圧倒的な変化は，技術開発の国際競争を一層激しいものにしていったのである。

このような専門的な分野ばかりでなく，それと対極にあるような大衆社会のなかでも「飛行機」や「パイロット」という言葉は，時代の変化を感じさせるメディア（媒介物）として一般の人々のなかで話題になっていく。「飛行機」の想像を絶するスピードと加速，距離にたいする感覚をまったく変えてしまう速さ，野性味と近代性がミックスしたような特別な領域，そのようなイメージが一般の人々に「飛行機」にたいする関心を呼び覚ましていく。「飛行士」はこのような冒険に身を晒すヒーローであり，古典ギリシャの pēdón（柁）を語源とする「パイロット」（Pilot）という響きと共に，その特別な感覚が大衆のなかに受け入れられていったのである。

「飛行機」及び「パイロット」のこのような大衆性は，それを伝える媒体とも深く関わっている。冒険小説や大衆雑誌のなかで写真入りでそのヒーロー性が宣伝され，映画（ニュースやドラマ）などのエンターテイメントのなかでも積極的に取り上げられることなる。いわば現代版の中世騎士冒険物語のような扱いを受ける現象も少なからず見られたのである。しかし，このような大衆メディアではなく，芸術性の高い詩，小説，演劇のなかでも「飛行機」及び「パイロット」は新しい時代の象徴として好んで扱われるテーマになる。未来派やダダの作品にこれらのテーマを探すことは決して難しいことではない。

図版 1 は「飛行機」「パイロット」という概念が 20 世紀初めにどのような広がりのなかで使われ，浸透して行ったのかを示すものである。「専門性」と「大衆性」を横軸に置き，それらに共通するものとして「経済性



図版 1
20 世紀初めにおける「飛行機」「パイロット」という概念の広がり

（利益）」を挙げた。「専門性」に関わるものとして「企業」「軍」「専門機関」という概念を例示，「大衆性」には「スピード」「野生」「冒険」の概念を対置した。縦軸に「高いメディア」（「詩・小説・美術」）と「低いメディア」（「大衆誌・冒険文学・エンターテインメント」）の区別を設けた。このような 4 つの領域のいずれにも深く関わった具体的な人物として，本論ではエーレンフリート・ギュンター・フォン・ヒューネフェルト男爵（Ehrenfried Günther Freiherr von Hünefeld, 1884–1929）を取り上げたいと思う。この人物が 4 つの領域に複合的に関わっている状況を再現するには，ヒューネフェルトに付帯すると考えられるイメージ，あるいはそのイメージに近接する言葉や概念のランダムな配置が必要になる。この作業を進める上で大変参考になる方法をフェルナンド・エスポズィートが構想している。これは記号論や歴史解釈学の方法を援用しながら編み出されているが，本論ではその方法論上の問題には立ち入らず，さっそくヒューネフェルトを分析するための可能性の領域に進んでいきたい。

2. 記録の中のヒューネフェルト

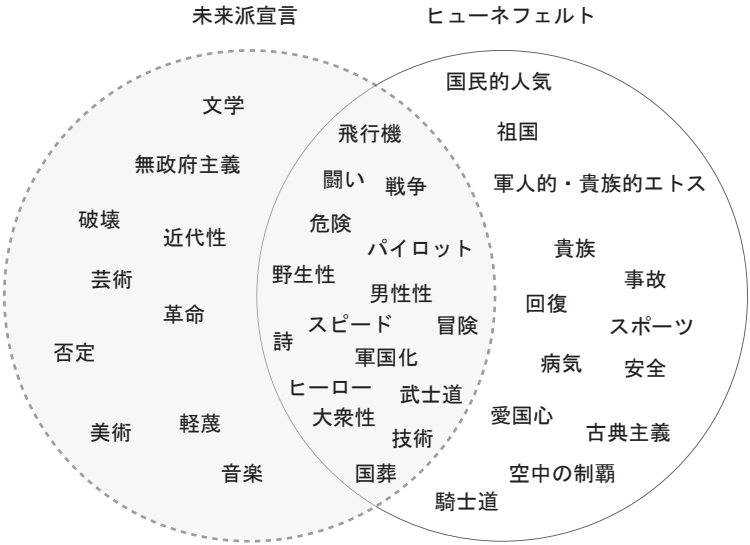
フェルナンド・エスポズィートは著書『神話的モデルネ』„Mythische Moderne“（2011）のなかで，パイロットという概念が「ある時点」においていかなるものであったか，あるいはあり得たのかを説明するためのモデルを提示している。このモデルはパイロットを辞書的に説明する通常のディスクルスを脱して，パイロットにまつわる近接域を表示し，「ある時点」においてどのような傾向を帯びているかによって，パイロットにたいするイメージの構成や変動を動的に示すモデルであり，本論との関係で有効なものである[2)]。図版 2 は，このモデルを参考にしながら，本論の主旨に合わせてアレンジしたものである。

これは，パイロットとしての「ある時点」でのアイデンティティを，パイロットと無関係な事項によって説明すると同時に，各事項の組み合わせの差異によって，時間軸や空間軸におけるパイロットの意味の異動も表示しようとする企てである。空を飛ぶ技術（Aviatik）に関わるシンボル群がどのように機能するのか，例えばパイロットを問題にしながら同時に貴族的なものに対する新しいイメージが，そこにどのように関わる可能性があるのか，等のテーマについて，おおまかな連関性のなかでとらえる手がかりとなりえるのではないだろうか。

本論では，エーレンフリート・ギュンター・フォン・ヒューネフェルトという，日本ではこれまでほとんど考察の対象になったことのない人物を取り上げることになる[3)]。ヒューネフェルトは1928年の秋にユンカース製飛行機 W33 でベルリンから上海経由で東京・立川飛行場を目指して飛来

2）Fernando Esposito: Mythische Moderne. Aviatik, Faschismus und die Sehnsucht nach Ordnung in Deutschland und Italien. München: Oldenbourg Verlag 2011, S.21ff.

3）ヒューネフェルトについては，拙論「ワイマール期の自動車ブーム風刺—1928 年刊行の『ジンプリチシムス』—」『ドイツ語学・文学』（慶應義塾大学日吉紀要）第 50 号，2013 年，S.48ff. も参照。



図版 2
ヒューネフェルトと「未来派宣言」の言説空間

したパイロットであった。しかし，ヒューネフェルトはパイロットとしての正式な資格を持っていたわけではない。そのような人物がなぜベルリンから東京までの長い飛行をすることができたのであろうか？　その理由は特に難しいわけではなく，同乗した人物の一人が正式なパイロットであり，もう一人は熟練した整備士であって，ヒューネフェルトは飛行機のなかでは助手的な立場であったに過ぎない。二人の同乗者とは，スウェーデンのアエロ・トランスポート株式会社のチーフパイロット K.G. リントナー，もう一人はドイツのユンカース社の整備技師レンゲリッヒである。当時の日本の新聞を見ると，二人のことはほとんど話題にならず，助手的な立場であったとはいえ，もっぱらヒューネフェルトのことが記事のなかで取り上げられているのである。例えば，1928 年 10 月 18 日の讀賣新聞朝刊 11 ページには次のような中見出しが掲載されている―

ドイツ最初の訪日機けふ一気に立川へ
昨夜十時上海を出発す

これに続く小見出しは以下の記述である―

【上海十七日発聯合至急報】訪日ドイツ飛行家ヒユネフエルト男は本日午後十時五分当地出発東京に向つた

すでに述べたように，正式なパイロット資格を持っていたのは同乗者の一人にとどまるが，この二人については記事のなかで，「独逸のフオン・ヒユウネフエルト男爵同乗レーゲンリツヒ氏及スエーデンのリンドネル氏持舵のユンケル三十三型単葉機オイローパ号（ヨーロツパ号）」という形で言及され，飛行機の操縦は二人によるものであることが分かるようになっている。しかし，小見出しでは「訪日ドイツ飛行家ヒユネフエルト男」とあり，ヒューネフェルトは男爵であると同時に「飛行家」であることが強調され，記事の本文にあるよりもヒューネフェルトがパイロットとして飛行したイメージが鮮明に打ち出されているのである。このような日本の記事をどのように意味付けるのかは難しい作業であるが，先のエスポズィートの構図を参考にしながら分析するならば，「飛行家」パイロットに近接する領域として「貴族」「冒険」「航空機」「国家」「技術」「スピード」というシンボル群が「飛行家」ヒューネフェルトのイメージを創出し，それが新聞というメディアを通して「大衆」のなかに持ち込まれている，という経路が想定できるのではないだろうか。当時の日本が「軍事大国」を目指していたことを考えると，この記事には「戦争」「騎士道」「武士道」の意味連関が作用していると言えるかもしれない。記事のなかでは，二人の実際に操縦したパイロットが「独逸のフオン・ヒユウネフエルト男爵」に「同乗」しているかのように記載されており，「国家」と「貴族」というシンボルがいかに重要であったのか，それが分かる。実際，「銀杯壱組

ヲ賜フ」の賞状（賞勲局総裁正四位勲二等天岡直嘉より授与）は，「独逸国人フライヘル・フオン・フユーネフェルド」にのみ与えられている。

ヒューネフェルト現象においてさらに注目すべき傾向は，1928 年 10 月 19 日の朝日新聞夕刊の次の見出しのなかに見出すことができる。

「不自由な體の持主隻眼でビツコのフ男」

この小見出しには，先の図版のなかの「冒険」「貴族」と並んで「病気」という領域が新たに加わって，同時的に作用していると考えられる。「フ男」とは「フユーネフエルド男爵」の略語。朝日新聞には数日前から関連記事が掲載されており，読者にはヒューネフェルトが「男爵」という貴族身分を有していることは了解済みである点を前提にすれば，「フ男」という略語の機能は了解できるであろう。見出しに続く記事には，「不自由な身體」にもかかわらず，「大西洋横斷」にも成功していた事実が記述されている—

「オイローパ號の指揮者フユーネフエルド男は今年三十七歳の壯年で隻眼でビツコといふ不自由な身體の持主であるが今春ブレーメン號を操縦せるケール大尉のパトロンとして同乗し逆コースによる大西洋横斷に成功した，この時も非常な難飛行で吹雪の荒天は遂にグリンリー島に不時着陸を余儀なくし當時世界の視聽をひきつけた事は尚世人の記憶に新たなるものがある，操縦リンドネル氏はスエーデン飛行界の花形であり，機關士レンゲルリツヒ氏はユンケル飛行機會社の技師として令名がある」

「吹雪の荒天」「不時着」などの言葉は「冒険」という領域を強調している。さらに「グリンリー島に不時着陸を余儀なくし當時世界の視聽をひきつけた事は尚世人の記憶に新たなるものがある」という表現は，ヒューネフェ

ルトの冒険が欧米で大きな注目を浴びている事項であることを読者大衆にアピールしている。このような「外国」での評価という要素が，日本飛来のニュース価値に影響を与えている側面が，この記事から読み取れるであろう。因みに数日後の朝日新聞には，「獨勇士」という言葉が踊り，その勇士の日程（「晩餐朝日新聞」を含む）が紹介され，当時の大物扱いの様子を伝えている―

「獨勇士」の日程
獨機「オイローパ號」のフユーネフエルド男一行の帶京中のプログラムは左の通りである
△十九日　遞信省陸海軍外務省市役所久邇宮御邸を訪問，午餐ドイツ大使館，晩餐朝日新聞△二十日　午餐三井，晩餐ドイツ大使館△二十一日　夜帝劇△二十二日　三菱歡迎會△二十三日　午餐帝國飛行協會，長岡外史邸でテイー・パーテイー，晩餐日獨協會

この日程で興味深いのは，ヒューネフェルトの飛来は遞信省・外務省ばかりでなく，陸海軍に深く関わり，さらに当時の軍事産業の中核である三菱で歓迎パーティが開催されたことであろう。「帝國飛行協會，長岡外史邸でテイー・パーテイー」もこのディスクルス上にあり，長岡外史は「戦時」に役立つ飛行機の必要性を説き，1915 年に国民飛行協会（1918 年に帝国飛行協会に改組）を創設した人物として知られる政治家である。ヒューネフェルトの「航空機」「貴族」「冒険」「病気」「技術」などの領域は，「軍国化」「戦争」の領域とリンクしていたことを，朝日新聞の報道は鮮明に示しているのである。

それではドイツの新聞報道はどのような状況にあったのだろうか？1928 年 10 月 19 日の『フランクフルト新聞』の見出しには，「ヒューネフェルト不時着，二名のパイロット無傷」と記載されている。これに続く記事を見ると，二名のパイロットとは「ヒューネフェルト男爵とリントナ

ー」のことであり，機關士レンゲルリツヒのことは一言も触れられていない。ヨーロッパ号の所有者ヒューネフェルト男爵が「パイロット」とはっきり同定されている点は，ヒューネフェルトの大西洋横断がアメリカで高い評価を受け，単なる「パトロン」を超えた言説を生み出している現象と見ることができるであろう。

ヒューネフェルトはこの年の4月にはアメリカにも飛行していた。当時の様子を伝える貴重なドキュメンタリー映画（„Hermann Köhl. Der erste Ost-West-Flug über den Atlantik. Der Pionierflug vom 12. und 13. April 1928“）[4] によると，向かい風に抗してヨーロッパからアメリカの方向へと飛行するという大胆な試みに，ヒューネフェルト，ヘルマン・ケール大尉，ジェームス・フィツモーリス少佐の三人のクルーは初めて成功したのである。1928年4月16日刊行の雑誌『ジンプリチシムス』の表紙には，「大西洋横断の冒険の季節が始まり，多くの犠牲者が出ている」ことが風刺的に描かれている。描かれている図像によると，死神はドルの記号入りの袋を手に翳しており，アメリカのメディア産業が背後で仕組んでいることが暗示されている[5]。いずれにしても，このような一種のブームのなかで，ヒューネフェルトの「東から西への飛行（„Ost-West-Flug“）」の試みが最初に成功し，ドキュメンタリー映画には，数万人規模と思われるニューヨークでの熱狂的な歓迎行事や，帰国後のブレーメンとベルリンにおける熱狂ぶりが描かれている。映像には，パイロット・ケールの夫人の次の発言が記録に留められている。「アメリカにおける祝賀パーティーやアメリカ人の熱狂的歓迎・大規模なお祭りが一通り終った後で，ヘルマンに突然次のことがはっきりしてきたのです。それは，この熱烈なアメリカ人の歓迎は，三人の飛行士の業績ばかりでなく，祖国ドイツ全体にたい

4）Roland Kleinhempel: Filmdokumentation mit Originalszenen. Blaustein: alphaCam/AVM 2010.

5）Simplicissimus, Illustrierte Wochenschrift. Jahrgang 33. Nummer 3. Stuttgart: Simplicissimus-Verlag 1928, S.29.

図版 3
ユンカース社の社報（1928 年，第 5 号）の表紙。タイトルは「ヨーロッパ号の東京着陸」。（出典：Deutsches Museum Archiv,Junkers-Archiv.Juprop 653）

して向けられたものだ，ということです。」）

エスポズィートの考案を基に作成した図版に戻れば，このドキュメント映画からは，「航空機」「技術」「スピード」「大衆国家」の領域と並行して「愛国心」「祖国」といった要素がミックスした形の熱狂の構造が読み取れるであろう。

ヒューネフェルトの日本飛行についてはドキュメンタリー映画は存在せず，当時のドイツの新聞からドイツ側の反応を見るしかないのであるが，筆者が調査した限りでは，東京の多摩川（現在のガス橋の近く）に不時着した様子を伝えるものが主であり（図版 3），アメリカ飛行の時点に比すると，図版 2 に新たに加える要素はないように思われる。しかし，このことは逆に，日本にたいする当時の一般的な関心が必ずしも高いものではなかったことを物語っているのではないだろうか。ヒューネフェルトたちはアメリカに続けて同じ年に日本に飛んでおり，専門家・産業人・政治家と一般大衆の間では，日本にたいする関心の持ち方に大きな落差があったともいえるのではないだろうか。

当時のドイツの新聞に見られる少し距離を置いたような対応の背景には，さらに次のような要素も考えられるであろう。ヒューネフェルトやケールは，第一次世界大戦の敗戦後オランダに亡命していた旧皇帝一族を，日本飛行にも使うことになるヨーロッパ号に乗ってヨーロッパの各都市に凱旋する途中で訪問しており，このことがドイツのマスコミに肯定的に受け止められなかったという事情がある。当時ケルン市長であったコンラート・

アデナウァーがこの訪問を聞いて，ケルンの飛行場で予定されていた正式行事をキャンセルするという事態も実際に存在したのである。この一連の出来事からは，―図版 2 に戻れば―ヒューネフェルトの「貴族」「愛国心」という領域が作動していると考えられるであろう。次にヒューネフェルト自身の発言に少し耳を傾けてみよう。

3. ヒューネフェルトの自伝的記述―病気と障害

大西洋横断に参加した三人の乗員にたいして，アメリカの出版社から記録を兼ねた自伝的著作の依頼があり，これに応じる形で，『空の三銃士』を刊行，ヒューネフェルトはその中で，自分の身体の欠陥について次のように書いている―

「片目男にはパイロット資格は与えられなかったが，専門家からも一人前の人物として認められた。男の名前はヒューネフェルト，生まれながらに右目に強い近視の兆候が確認されたのである。」[6)]

同じ『空の三銃士』のなかにつぎのような記述も見られる―

「我人生の結節点，新たな始まりは外務省の委託によるコンスタンティノーペル旅行。自国内から始めて脱して，世界での仕事，外国で国のために尽くす。しかし戦争の影。重度障碍者ヒューネフェルトは外交官の仕事を引き受ける意志ありやとの問い合わせに即了承。当然の回答。」[7)]

6）Hermann Koehl, James C. Fitzmaurice, Guenther von Huenefeld: Die Drei Luftmusketiere. Die Geschichte des ersten Atlantikfluges von Ost nach West. New York/London: G.P. Putnams’s Sons, The Knickerbocker Press 1928, S.248f.

7）Hermann Koehl, James C. Fitzmaurice, Guenther von Huenefeld: A.a.O., S.246f.

上記二つの引用から，自分の障害にたいする認識の深さと愛国心（その背後にある戦争）の強さの共存という興味深いディスクルスの存在を確認できるであろう。以下の引用はこのディスクルス上に展開する「武士道」「騎士道」「男性性」に関わるものであるが，これはヒューネフェルト葬儀のときに元ドイツ帝国皇太子ヴィルヘルムが悼辞の一部に加えた，皇太子自作の詩である[8)] —

怖れなき全き騎士
汝は真に生き，闘い，勝利す
魂の内より真の貴族
今棺に横たわれり

この詩にはヒューネフェルトに付帯するイメージ群を構成する概念が頻出している。つまり「騎士」「戦争」「貴族」などの概念が，詩文の反復性によって効果的に高められていると言えるであろう。

以下の文章はヒューネフェルトの家庭教師であった牧師ヒェーネを回想したものであり，『空の三銃士』のなかに収められている—

「先生はゲーテをドイツの最も偉大な人間の一人として情熱を持って崇拝されていましたが，そのゲーテはスポーツ精神に溢れた私のようなボヘミアンにとっても尊敬に値いするものです。ゲーテの言葉『我は人，そは闘争者の意味なり？』は私の人生のライトモティーフでもありました。我らは闘いを好みます。それは闘うことのためでしょうか？その通り！闘いの目標を見られるのは成熟した人間だけです。若者は競い合いを求めます。

8）以下の古文書に記載されている—Berliner Dom Registratur. Acta.Bestand Nr.8203 Vol I. Trauerfeier für den Ozeanflieger Frhr. von Hünefeld am 9.2.1929.

説明し難き理想，しかし理想は理想です！目標，そは空中の制覇！」[9]

ここには「闘い」「スポーツ」という概念群が作用しているが，同時に競い合って高まるという古代ギリシャ的なものへの憧憬を感じ取ることも出来る。因みにヒューネフェルトの父親は初代帝国オリンピック委員会のメンバーであった。ヒューネフェルト自身はギリシャ語，ラテン語という古典語に造詣が深かったことも指摘しておきたい。これらのイメージ群が，「空中の制覇」という飛行機と結びついていることは興味深い現象である。

ヒューネフェルトは少年期における「最初の軍事訓練」について次のように回想している―「歩行，銃装着，行進開始，体操，射撃，これらの一連の行動の反復，それは忘れがたいものである。自分の生涯に渡ってこの時代に受けたものが体に残り続けたのだ。身体的規範は精神的規範の生みの親。人間の生のライトモティーフとして，わたしはこの言葉は真に正しいと思う。」[10] 生まれながらの身体障害と，ここに示されている健全性の共存は，おそらくヒューネフェルトの貴族的な精神と深い関わりを持っていたのではないだろうか。帝国時代においては，貴族には高い軍人性が求められていたことを前提にするならば，ヒューネフェルトの上記の記述は理解できるように思える。このような貴族的精神がパイロットとしてのパイオニア精神と結びついていることは極めて興味深い現象と言わねばならない。

ヒューネフェルトはタイタニック号のカタストロフィにも言及しながら，『自伝』のなかで「危険」，「事故」，「安全」という問題域に入り，国際レベルの協力の必要性などが飛行の分野においても議論されねばならないと指摘している―「私たちはカタストロフィから学ばねばならない。航海の

9）Hermann Koehl, James C. Fitzmaurice, Guenther von Huenefeld: A.a.O., S.252.

10）Hermann Koehl, James C. Fitzmaurice, Guenther von Huenefeld: A. a.O., S.254f.

図版 4
ニューヨーク・ブロードウェーにおけるヒューネフェルト達の成功を祝う祝賀パレードの様子（出典：注 6 に記載の文献）

歴史もカタストロフィやあらゆる種類の事故と密接に関連している。航海士が何百年にも及んで体験してきたことが決して驚くべきことではなく，当然のことのように今日では思えるのであるが，このことは飛行についても当てはまるに違いない。設計師や技師にすべての責任を負わせることは意味のないことである。実践的・試験的な飛行を繰り返すことが何よりも不可欠なのである。タイタニック号のカタストロフィによって初めて，海上で人間の命を守るための国際協定の必要性を議論する会議が開催され，同様な事故が将来起きないようにする方法が生み出されたのである。」[11)]

ヒューネフェルトがアメリカ飛行に成功し，アメリカで大歓迎されたことは先に述べた。そのヒューネフェルトが亡くなった時のニューヨーク市長の以下の挨拶は，ヒューネフェルトを取り巻くイメージ群を再構成する上で貴重な情報源となる―「ヒューネフェルト男爵は偉大な真のスポーツマンであった。ヒューネフェルトは絶えることなき栄誉と共に歴史の中に生き続けるであろう。飛行機による東→西ルートの大西洋横断の指導者，原動力，それを実現するために総てを統括する精神，これらのすべての面でヒューネフェルトは真の栄誉を得るにふさわしい人物である。ヒューネフェルトはこの大いなる冒険のために全財産を犠牲にし，健康面では多く

11）Hermann Koehl, James C. Fitzmaurice, Guenther von Huenefeld: A. a.O., S.271.

の問題を抱えていたにも拘らず，ヒューネフェルトの勇気と挑戦の精神がこの偉大な飛行を断固遂行することを可能にしたのである。」[12] ここでは，「貴族」「スポーツ」「冒険」「勇気」「犠牲」というイメージ群が「病気」との対比のなかで特に強調されている。

図版４はニューヨーク・ブロードウェーにおけるヒューネフェルト達の成功を祝う祝賀パレードの様子を記録した写真であるが，この成功がいかに大きな大衆性によって迎えられたかを示す貴重な資料となっている。『空の三銃士』のなかでヒューネフェルトは，「われわれを歓迎する行事について詳しく記述しようとすれば，数巻にも及ぶ書籍が必要になるであろう」[13] と述べており，自分たちの冒険的飛行が圧倒的な大衆の支持を得ていたことを記録に留めている。

4. ヒューネフェルトの詩と大衆誌

さて，ここでヒューネフェルト自身が創作した詩を紹介しておこう―

我等，暗闇の夜にあるも戦い抜きし
我等が前にはさらなる戦いあり
勝利するも戦争終わらず
燃え尽くす火を消すこと
人類の手にては成し得ず
戦いの炎を守るは神ご自身である故
流れる泉のごとく休むことなく
我等を終わりなき戦へと駆り立てる炎

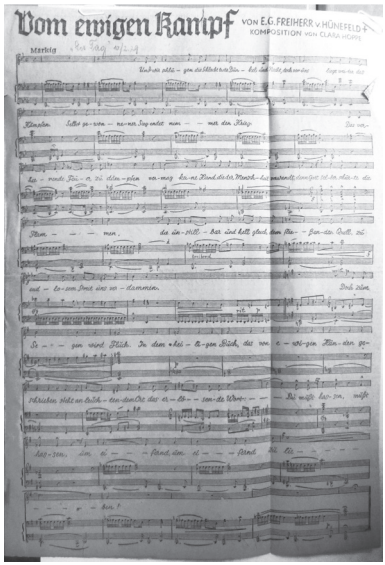
12）Friedrich Walter: Hünefeld. Ein Leben der Tat. Potsdam: Ernte-Verlag 1930, S.195f.

13）Hermann Koehl, James C. Fitzmaurice, Guenther von Huenefeld: A. a.O., S.371.

図版 5
ベルリン大聖堂におけるヒューネフェルトの国葬（Berliner Domarchiv 所蔵）

呪いは至福になりき
聖なる書物において
永遠の手になる書物のなかで
光輝の場に
救済の言葉ありき：まずは憎むべし
愛に達すべく競うには

ヒューネフェルトのこの詩は，現代から見ると戦争礼賛のような響きをもつものとして否定的な評価をうけるかもしれないが，戦争や愛国心にたいする当時の志向の内実を見る上で貴重な資料と言えるであろう。つまり，戦の継続は人間の意志を超えた領域にあること，至福の実現には「憎しみ」「呪い」が前提となること，これらの言説の背後にはヒューネフェルト自身の身体的障害との戦いが想定できるが，しかし一方で戦争状態を日



図版 6
クララ・ホッペの曲『永遠の闘い』（Berliner Domarchiv 所蔵）

常の現象として受け入れようとする当時の時代風潮が存在しているとも言えるのではないだろうか。この詩は，ヒューネフェルトのベルリン聖堂（Berliner Dom）で行われた国葬（図版 5）の翌日，1929 年 2 月 10 日のベルリンの大衆日刊新聞『デァ・ターク』にクララ・ホッペによって作曲された楽譜とともに掲載されている（図版 6）[14]。ト短調から始まる力強い行進曲風のメロディに乗って，この「愛国的な詩」は紹介された。

この作品の作曲家クララ・ホッペは 1857 年ポーゼンに生まれ，ベルリンで歌手あるいは音楽教師として活動した。この楽譜を掲載した新聞『デァ・ターク』は，ベルリンで広範な購読層を持つ有力新聞の一つであった。

14）„Der Tag“ のこの記事は以下の文書に収められている―Berliner Dom Registratur. Acta.Bestand Nr.8203 Vol I. Trauerfeier für den Ozeanflieger Frhr. von Hünefeld am 9.2.1929.

比較的短い記事で短時間の内に情報を提供し，その際に娯楽性も加味した配慮が目立つ新聞であった。ワイマール時代においては，新聞や雑誌メディアに楽譜を掲載することは一般的に広く行われていることであった。同時代の新作やアレンジ曲などはこのようにして読者に提供されていたのである。掲載される曲は難易度で言えば中程度の部類に属し，ピアノを一定程度の水準で弾ける子弟であれば比較的容易にすぐ演奏できるようなレベルであった。家庭の一室で弾かれて，開いた窓を通して道にメロディが流れることによって，一般に広まるチャンスがあったと言えるであろう。読みやすい楽譜を理解する力は，都市市民の間に広く存在していたと考えられる。さもなければ，このような楽譜が比較的頻繁に紙面に掲載されるような状況はあり得なかったであろう。平均的な新聞読者は，掲載楽譜によってメロディを想像し，口ずさむことは出来ていたと考えられる。

クララ・ホッペの曲（タイトルは『永遠の闘い』）はシンコペーションの構造を持つ英雄曲であり，「堂々と」という演奏指示の記載がある。闘いの始まりを予感させるト短調で始まり，曲の前半は戦場の暗さや戦いの永続が常に陰鬱なメロディで表現されている。伴奏は 32 分音譜で落ち着きの無さを巧みに表している。後半になると曲想が一気に変わり始め，上記の詩の言葉に対応するように，ト長調によって讃美歌風の救済をモティーフとするメロディになっている。戦闘の継続・必要というテーマと平和・救済のテーマの併存という現象は，この時代に一般的に受け入れられていたものであり，ヒューネフェルトの詩はこのような音楽の媒体を通して，大衆性を獲得していったと考えられる。

5. ヒューネフェルトと未来派

「吾等の頌せんと欲するところは戰なり。戰は唯一なる世界の衛生法なり。又軍人主義なり。自由の爲めに戰ふ戰士の做し出す破壞なり。吾等は人の之が爲めに肯て死する諸理想を讃美す。又女子に對する輕侮を讃美す。」

これまでのヒューネフェルトの記述を基にすれば，上記の文章はヒューネフェルトの手になるものである，と述べても納得を得られるのではないだろうか。しかし，実はこの文章は F.T. マリネッティ（1876–1944）の未来派宣言の第 9 項にあるものであり[15]，ここに引用したものは，この宣言を日本に最初に紹介した森鷗外の翻訳である。鷗外は 1909 年，雑誌『スバル』に掲載した「椋鳥通信」[16] のなかで未来派宣言の全訳を試みているが，当時はほとんど注目されず，3 年後讀賣新聞に高村光太郎が「未来派の絶叫」を掲載したあたりから，特に美術分野における「芸術の革命」として受容されるようになった。1920 年代になると，ロシア未来派の紹介が盛んになり，1920 年 12 月には大阪で「未来派美術協会展」が開催，翌年には東郷青児がパリでマリネッティに会っている。1922 年には村山知義と永野芳光がベルリンで開催された「大未来派展」に出品，同年，東郷はボローニャにおいてイタリア未来派の展覧会と宣伝活動に参加している。「未来派美術協会同人」の結成など，これらの年にさまざまな組織化の動きも見られたのである[17]。このように，日本では未来派は主に美術運動として受容されたのであるが，未来派そのものは美術運動あるいは芸術運動としての側面を持つばかりでなく，ヨーロッパではそれらと密接に関連しながら時代そのものを具現する運動として重要な役割を担ったのである。鷗外が 1909 年の段階で『スバル』に未来派宣言を紹介した意図は必ずしも明らかではないが，「飛行機」という翻訳語を生み出すなど，当時のヨーロッパの新しい時代の流れに敏感であった鷗外は，マリネッティの未来派宣言のなかに，時代の変化と新しい芸術の勃興の関連を見ていたのではないだろうか。

15）未来派宣言の独訳については，Jean-Pierre A. deVillers: Le premier manifeste du futurisme.Éditions de l’Université d’Ottawa, 1986, S.128ff. を参照。

16）森鷗外：椋鳥通信，鴎外全集，岩波書店，第 27 巻，1972 年，S.14f.

17）井関正昭：未来派—イタリア・ロシア・日本，形文社，2003 年，S.367ff. を参照。

筆者がここで未来派のテーマを持ち出したのは，ヒューネフェルトという人物を評価する上で，未来派を無視することはできないと考えるからである。もちろん，ヒューネフェルト自身が未来派に言及した箇所などはまったく存在しないのであるが，マリネッティの未来派宣言のなかには，ヒューネフェルトと重なる興味深い領域を指摘できるのである。

ここで，フェルナンド・エスポズィートの著書『神話的モデルネ』のなかで展開されているものを基に作成した図版 2 に戻りたいと思う。上記の未来派宣言から，「戦争」「軍国化」という概念を取り出すことができるが，次の第 8 項からは，ヒューネフェルトに重なる局面を指摘できるであろう―

「時間と空間とは死したり。而して吾等は既に絶待に住せり。吾等が同時にあらゆる處に在るべき無窮の速を成就せしは其證なり。」

ここでは「無窮の速」と翻訳されている，これまでの時空の観念を破壊してしまうほどの絶対的な「スピード」という要素が強調されている。ヒューネフェルトはこの新しい「スピード」を実際に具現した人物であり，しかもその実現には未来派宣言第 1 項で言われている「危険」を敢て行う「冒険」心，鷗外が「威力」と翻訳している「エネルギー」が必要であり，これらの領域はヒューネフェルト自身の言葉にもしばしば現れていたものである。

未来派宣言第 7 項の鷗外訳は以下の通りである―

「美は唯闘に在り。苟も著作品にして攻撃的（Aggressivo）性質を帯びざる限は安んぞ傑作たることを得む。詩とは不知諸力に對する暴力的攻撃にして，不知諸力はこれによりて人類の用に供せらるるに至るものなり。」[18)]

18）森鷗外：椋鳥通信，S.14.

未来派は詩の性格の記述に終始しているが，ヒューネフェルトの方に議論を展開する場合，詩の性格記述に使われている形容詞などの言葉が重要になる。ここでは，鷗外がわざわざイタリア語の原語を残しているaggressivoという言葉に注目したい。

2008年にベルリンで刊行された『実験工房中世』によると，aggressivという言葉は歴史的には，キリスト教の模範的行動様式から異教を見た場合の評価表現の一つとして用いられていたようである[19)]。つまり秩序を平和的に維持しようとする側から，それを破壊するような行動にたいしてaggressivという表現を使う傾向が歴史的・語源的に確認できるわけで，鷗外もおそらく，単に攻撃的というのではなく，既存の秩序や習慣に揺さぶりをかけるというaggressivoの生産的な意味合いに気付いていたのではないだろうか。ヒューネフェルトは軍人貴族のモラルを強く内面化している人物であり，鷗外の訳で言えば「不知諸力」にたいして当時の新しい技術を用いて果敢に挑むことによって，人間社会の便に役立てる可能性を追求しており，この意味においても未来派的心性を具現していると言えるのではないだろうか。ヒューネフェルトの場合，この攻撃性は自分の身体にも向けられ，身体障害や癌などの病に対してこれを絶えず克服する試みに挑んでおり，貴族・軍人的エトスを持ちながら自己克服に挑戦するという点から見ても，詩論として展開された未来派宣言の精神を具体的に自ら生きた稀有な存在であったと言えるのではないだろうか。

ヒューネフェルトのなかに未来派的要素を探索する試みは，未来派宣言の著者であるマリネッティとの比較考察という次元にまで至ることになろう。二人の死は，当時極めて注目すべき出来事として，最もレベルの高い公的行事，つまり国葬という形で栄誉を得ることになる。二人に共通する，スピードに対する熱狂や攻撃性が最終的に国葬という公的栄誉に繋がっている点だけを取り上げても，個人的には全く面識のない二人の人生のなか

19）Michael Bogolte u.a.(Hrsg.): Mittelalter im Labor, Berlin: Akademie Verlag 2008, S.470を参照。

に，未来派という言葉に収斂されている時代潮流が濃密で具体的な姿を取って現れている，と言えないであろうか。ヒューネフェルトとマリネッティの比較考察については，未来派を時代潮流と見る筆者の視点を含めて，これに続く論文のなかで，具体的な資料をさらに提示しながら展開したいと思う。